

助産婦としての被爆後

広島市  一

岡村 ヒサ子

八十六歳

私は当時、尾長町で助産婦を開業しておりました。

尾長町の本通りをつきあたりまして、山へ向って行ったら矢賀町でございます。

爆心地より二キロメートルになります。

今八十五歳でございます。ちょうど四十一歳のときに被爆いたしました。

その頃はまだ家庭分娩が多うございましたが、だんだん少なくなりまして、昭和三十年頃には、皆、産院の方に吸収されました。どうしても零細な産院でも開こうという話になりまして、十五、六人程それぞれで持ちましたんですよ。

それは皆さんがよく用いて下さいまして、これではやりきれんがと思う程、お産が一時ございました。

何も記録を持って来ていませんが、昭和三十年前後でございました。奇型が沢山出ましたね。

あの当時はABCへ、みな報告をしなくてはいけないシステムになっていました。

奇型が出まして、ABCへ報告するのをきらう人もございましたのでした。なかつたこともございます。

一番多かったのが兔唇でございました。それも口蓋裂もあって、泣くと喉の奥まで見えるんです。お乳もよう飲まないような――。

それから肢指過剰ですね。多指です。それから鎖肛。肛門のないのも多かったです。

兔唇や多指は数が多かったです。もう分娩で、頭の先が出ましたら、今度も兔唇じゃないかしらと思ったら、矢張りそうで、たんびに憂えたことを覚えています。

あーどうしてこんなに兔唇が生まれるんかしらと思うようございました。

ちょうど近所でございましたが、この〇〇さんと、もう一軒の〇〇さんと同じように耳のない子が生まれました。

こっちの〇〇さんは、赤ちゃんのおばあさんになる方が〇〇病院の産婦人科の看護部長をしておられました。奇型が生まれたというのですぐ電話をしたらいいんですが、来られたそのあくる朝赤ちゃんが逝きましたからね。あー、そうされ

たのかと思いましたがね、これは今始めて口外することですが…。

もう一軒の〇〇さんは、そこにも耳のない子が生まれまして、可愛い女の子でございましたが…。おばあちゃんが「火葬場へ持って行くまで泣き出しはせんかしら」と言っておられました。何かの薬を飲ませたらしいんですね。

それはもう、いわば殺人でございますよね。これは薬を使っただけだと思いましたが。もちろん、家族も何も言いませんし、私も聞きもしませんでした。元気な子でございましたがね。そのおばあちゃんは生涯悩まれたようです。可愛い女の子だったですからね。髪の毛でね、こうやって耳をかくしていれば分かりますよ。耳がないんです。ツルツルとしておりました。片方だけ。

それから足の指が手の指と同じようなスタイルになっているものもございました。足の指がこんなに長いんでございます。

それから内臓露出で、グलगルと腸が出ておりました、思いついてはひどいヘルニアだったですね。大学病院で手術をして貰い、それはどうにか助かりました。

まだそれから、鎖肛、これは沢山ありました。それから無能児ですね。何時頃でしたか。とにかく終戦直後ではございませんね。しばらくしてからでございますね。

二一三年してから。

被爆直後の分娩でございますがね。尾長地区に七人の同業者がおりました。

皆それぞれに大なり小なり怪我をしましたんです。

お産を私に言ってくるんですね。私も体力がもたないし、どうにもなりません。生まれるのを親子を分けただけで良かったら行きますよ。後は責任を持ちませんと、それでもいいからというので行きました。重態の人はもう背中がベトベトで膿がドッド、ドッド出て、ポロポロウジが落ちる状態の人なんか横になることができませんので、座ったままでお産をしました。まあおかげのもので陣痛がそんなに沢山来ないのにバツと生まれました。後は出血もございましたけど、どうも手のうちようもございません。これはもう明日の昼頃までもつかしらと思いましたが、ちょうどその頃、お母ちゃんのお息は切れまして、その子はずっとその後来しましたが、今は四十四歳でございますよ。元気で結婚生活に入っております。その後どうなったか知りませんがね。

そういうお産が大分ございました。

(丸屋院長) さっき、無能児が生まれたと言っていたですよ。お母さんはいくつ位の人でしたか。

三十代でございます。どうしても頭の位置がわかりませ

んのよ。上の方にあるのはたしかに臀部だと思いましたが、頭部が触れませんのよ。おかしいことになあと見よりましたら、無能児でございました。氷を氷袋の中に入れて下げたらザラザラいいますように、頭蓋骨が全々かたまっていないのが二、三人ございましたね。

(丸屋院長) 二人ですか。三人ありましたか。

はあ、三人ございました。

だからそのような子が生まれましたら、極秘にしてもらいたい。こんなことは当時はとても言われはしません。

まだ娘が高校へ行ったら頃ですから、昭和二十四年から二十五年頃のことだと思います。

被爆当時の惨状は、どこでもお聞きになりましたでしょ。私も本当にいろいろな目に会いました。

原爆の前の日に矢賀というところに二人程お産がございまして、それを見に行こうと思って、八時に家を出まして、十五分に道路の真ん中で被爆しました。

小さいお寺がございまして、その奥さんが家屋疎開の木を風呂木に大八車に積んで引いて行くのを押させていたかどうかと思って、腕にカバンを掛けて、傘をさして押していました。

ピカッと光って私は飛ばされませんでした。さばっていま

したから。私の前を歩いていた奥さんが、二、三メートルころばれて、誰かしら私を突き飛ばしてからに、せっかく買ったヤミ米がみなこぼれてしまつてと言つてね。爆風とは知らないんですね。

光が紫になりましたね。山も天も全部が紫になりました。私の目には。

あまああどうしたことか、それでも爆弾にしては…。爆弾だろうけど、原子爆弾ということは分かりませんでしょう。

私は先程言いました〇〇さんという家に、どうしようかしらと思つたとたんに入りましたら、すぐに瓦がガラガラと雨が降るように落ちまして、よっぽどで重傷を負うところでございます。バタバタ、バタバタしましたけれど、幸いにキズを受けることがなしでした。救護にもどれ程幸いしたかわかりません。

原爆の当日のことですが、私が家を出るときに昔からおつてくれた留守番のばあさんがおりましたの。近所の方がお宅のばあさんは戸板に乗せて学校へ連れて行かれましたよと言われるものですから、学校へ行ってみましたけど、沢山の患者で、被爆者でどうにもなりません。

被爆者はゾロゾロ、ゾロゾロと来ましよう。両手にボロを下げたように皮膚が剥げましよう。そして裸で、ズ

ルむげになって「岡村さん、私早よう見て下さい」言って、知り人が多くございますでしよう。「まあごめんねえ。ひどい人を見てあげなきゃならんから」言うて、そういう人たちの処置をしますうちに尾長国民学校へ火がまわって来たというので、今度は中山国民学校へ避難して下さいと言うので、みんなドンドン中山国民学校へ行きました。

まあ自分の家はどうかしらと思って、家に帰って見ましたら、ばあさんが戻っておいりました。

私を見たあなたに、人事不省になりましたね。そこへ倒れました。まあどうしようかしらと思ひまして、先生はおわりませんし。その頃は耐乏の生活でしたが、お産へ行っても、ビタカンの一本くらいしなきゃあならんことは許されておりましたので、ビタカンを持っていたのを、これを使ってはいけんがと思ひましたが、注射をしてやりました。すると正気になって、まあ、おばあちゃん、防空壕に入っつてね、私はまた出て行かなきゃあならんから言うて、また出かけました。

中山国民学校へ行く途中に高田さんという悪意な家がありました。そこへ荷物をお願いしておったものですから、皆さんどうしたかしらと思ひて行ってみましたら、六人程被爆者が入り込んでいました。その家族の人と親戚の人と。

とうとう夜になりましたが、電気もありませんし、水道も

皆さんで水を飲ませてちょうだいという者で重態の人にはもう飲ませました。薬缶から、はい口を開けて、口を開けてと言つて。まだ元気な人には飲ませてはいけないというので、飲ませなかったのですけど。当日はそういうふうな状態でした。

被爆の中心地には、私はよう行きませんでした。

ずっと主人のことが気がかりでございました。ちょうど主人の近所の方が市役所におられたから、日赤へでも収容になっているでしよう言うてね。知らせてくれましたから、近所の方が捜しに出て下さいまして、日赤へ行ってみて、岡村さん、岡村さんと言つてかけてみただけ分らない言うて。私も捜しに行けばいいんですけれども、もう本当に、どうにも体が当分は、はあ、なんでございますよ。私も倒れそうなから思つて、二、三日寝ておりました。

ちょうど姉夫婦が鷹匠町に、中心地に家を持っておいりました。一撃のもとに家はベシヤンコになって焼けました。黒焦げ死体が二体程、これが姉だろう、背が高いからというようなことでございました。

市中の方は、私の口からお聞きにならなくとも皆さんから聞かれています。川にね、兵隊さんがブカブカ、馬が……四日目に知り人が、お宅さんにはご主人が元気で生きておられましたよと言つて。どこにおりましたかと聞くと、こう

ありませんね。井戸だけはございましたが。真暗いのにウン、ウンウン喰る人を徹夜で診たんでございます。そのようなものですから、私妊婦さんどころではないのです。

そうしまして、夜台所の四帖半位の畳の上に女の子が這い上がってウンウン、ウンウン喰りよりました。呻吟ですね。それから、おばさん、私のお母さんは白鳥だから呼んでちょうだいと言ひよりましたが、でも呼ぼう言つてもこんなに暗いのにね、どうにもなりやあせん、我慢してね、言つてこっちの方へ来て患者さんを診よううちに、ウンころウンころ言うのが止まりました。行ってみましたら、息が引けとりました。

翌朝、井戸端の方を見ますと、五、六人死んどりました。

中山国民学校へ行った日の晩でございますから。

中山国民学校へ当日行きましたときに、もうそれは……尾籠な話ですが、男の人がパンツを下げることでできませんでしよう。どういふ拍子で持っておりますか、切れ物を持っておいりましたので、それでパンツを引きさいてそこから引っぱり出して、用をさせたこともございます。

まあ……何といつても危急のことですから、電気もございませんし、それはもう、小水と便の垂れ流しで、足の踏み場がないようなのです。そういうのを端からかたづけたり、患

こうじゃと言つて金輪島へ収容されていたと。

金輪島は軍隊の建物があるだけで、無人島でございました。知らせて貰つたから近所の奥さんが、さあいうので御飯を炊いてくれて梅を入れて、おむすびをしまして、自分の体力で持てるだけ荷物を持って行きました。

行つてもここにそういう者は収容してはおりません言つて、宇品で。本人を見て来たと言うんだから乗せて下さいと言つて、じゃあまあ行つてみないといい言つて。

金輪島へ着きましても、やっぱり名簿にないと言われて。じゃあどなつてみて下さい言ひましたら、足元におりました、主人がね。

尻はボウボウと伸びて、出血して真背になって、ガラスで一ぱい破れた服を着て。始めて主人の涙を見ましたですがね。幸いなことに八十三歳まで生きました。健康管理に熱心な人間でございますね。酒も煙草もいただかん、腹も立てん、行き届いとりました。

(呑村夫人) 私は娘時代に母の産院を手伝っていました。

三十年を過ぎてからは、奇型はもう、ほとんどありませんでした。私が奇型が多かったと覚えてるのは、まだ学校へ行つておりました頃です。兎唇、口蓋裂でもびっくりしました。母が産婦のお母さんに見せんように、見せんようにとい

って。口がない。喉まで見えるんです。泣いたら奥がみな見えるんです。幽ぐきもないんですから。乳もよう飲まない。

(丸屋院長) 世の中が落ち着いたのは、昭和三十年頃ですからね。それまでは、医者がとりあげる数よりは助産婦がとりあげている方が多いと思うんですよ。医者のところへ行っている人は一応中流から上の人ですよ。

(呑村夫人) あの頃が全盛でしたからね。母が四十代……。ずいぶん分りましたからね。私はずいぶん分りました。私は昭和十年生まれです。大正十五年生まれの姉がおりまして、私と弟を連れまして、縁故疎開です。三年目に広島へ帰ってきました。四年生の時に行つて六年生の時に広島に帰って来ました。全然原爆には会っていません。姉はあくる日に、肉親を捜しに。

さっき無脳児の話が出ましたが、私は高等学校へ入学したのが昭和二十六年です。その頃からお産の手伝いをしましたが、私は無脳児のことは話に聞いたことも目にしたこともありません。今話をした兎唇やなんかは高等学校へ行きよる頃でしたから。二十九年に卒業しましたからね。さっきの話は多分二十四、五年くらいまででしょうね。そんな無脳児とか何とかというのは、私がお産を手伝うようになってからはありませんもの。

私がお産の手伝いをするようになってから、多指というの

は、ずいぶんあったと記憶しています。今日は足の指が六本あるとか、三十年ぐらいの頃に聞きよりました。

※呑村夫人は、岡村様の次女。

(一九八九年聞き取り)

